



技術を支える社員とともに
人の力を信じ、未来をつくりだす

工場内では主に開発部、技術部、プレス製造部に分かれ、社員同士が切磋琢磨しながら技術の向上に力を注ぐ。

1952年、氏神裕一社長の祖父が東京都世田谷区で興した東京端一株式会社。

1968年に誘致企業として秋田事業所が設立された。現在は中国にもプレス工場を構え、金型設計から金型製作、部品の生産まで自社内で一貫して行う。

0.04mmという極薄の金属材で金型を製作する高い技術力と提案力で世界を舞台に成長を続ける。

100%自社内で完結可能な技術力

「お客さまから部品図を頂いた後の金型の設計・製作、金型を使用した超精密プレスやプラスチック部品の生産から納入まですべて自社内で行っています」。

3代目となる氏神裕一社長の祖父が「東京で端子で一番になる」という想いを込めて名付けた東京端一株式会社は、社名の通り、創業当時から電話機の端子部分等、精密な電子部品の製作を手掛けてきた。1968年に誘致企業として大仙市(旧仙北町)に設立されて以降、本社機能も移行された秋田事業所では100人弱の従業員が様々な部門に分かれ、日々技術を磨く。

創業当時から“技術を内製する”をモットーに社内の技術力の向上に力を入れてきた東京端一が得意とするのは車両や携帯電話に使用する小型の電子部品。部品生産の命とも呼べる金型を1ミクロン(1000分の1mm)単位で製作し、米粒の1/3ぐらいの大きさの金属をまるで折り紙を折るかのよう曲げる加工力は、国内外で高い評価を得ている。

「自社内で全ての設計・製作を行うことで、安定した品質や納期の提供が出来るだけでなく、試作品を始めとする付加価値を付けた製品づくりが実現できています。さらに、自社開発設計の生産設備によって可能な限り工程の自動化を行い、世界のコスト競争にも負けません」。

変化は恐れない 時代を見据え技術を繋ぐ方法を模索

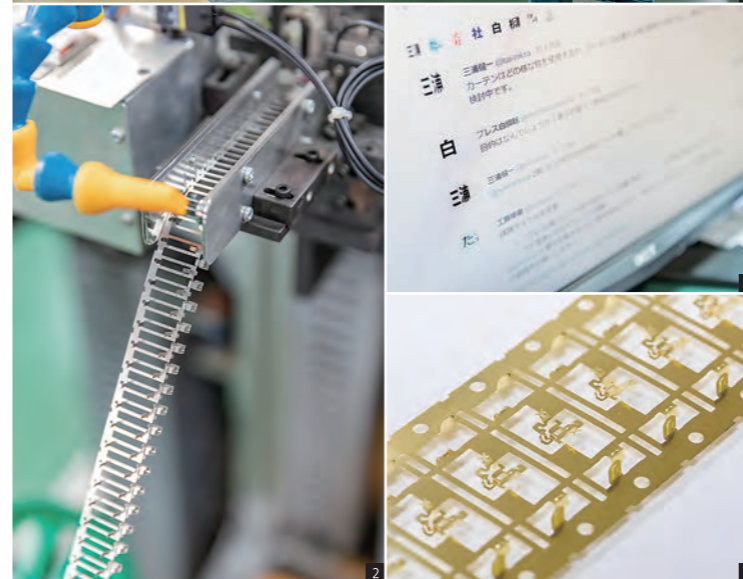
この技術力を支えるのが“人”だ。氏神社長が3年前に社長に就任してから特に力を入れるのは、ベテランと若手のコミュニケーションの仕組みづくり。少子高齢化が加速する中、将来的な技術継承を目的に、昨年は10代から30代の若手正社員15名を採用。現場を支えるベテランは65歳を超えても働ける環境を整えた。ベテランがいるうちに若手もコミュニケーションを取り、良い知恵を身につけて欲しいと、社長自ら積極的に社員に声をかけて回る。

そんな氏神社長の熱意に社員も応え始めている。若手の開

発チームからは、自発的に情報共有を目的とした社内SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の活用の提案があった。仕事の内容から日常連絡に近いものまで、ネットワーク上では1000件以上が書き込まれ、それぞれの担当者が管理する。始めは社内でも効果が疑問視されていたが、SNSの活用によって各案件の進捗状況の“見える化”は格段に増し、以前よりスピード感を持って対応できるようになった。さらに、終了案件もネットワーク上に“残っていく”ことで、次に同様の案件があった場合の引き継ぎもスムーズだ。

この他にも、社員全員が働く上で気づいたことを、気軽に会社に提案できる社内改善提案制度を2年前からスタート。「現場に段差があるからバリアフリーにしたい」「機械の使い方を変えてランニングコストを抑えよう」、気づいた人が積極的に声を上げ、その数は昨年度170件を超えた。現場での些細な気づきもコスト換算すると年間数十万円になることもあり、会社全体がより良い方向へと循環する。

「経営者の視点、現場からの視点、世代ごとの視点。1人の考えよりも100人の考えを引き出した方がずっと強いんです。



- 1 一連の工程を自動化することで24時間の稼働が可能
- 2 金型だけでなく、工場内のほとんどの機械が独自設計されている
- 3 社内SNS。課題解決担当者に氏神社長が指名されることも表紙
- 4 携帯部品の極小の金型。複雑な折り曲げ加工もお手の物
- 5 最後はベテランの目で行われる検品。ロスほとんど無い

ベテランも若手も、世代が違うと一言でコミュニケーションを取れと言ってもなかなか難しい。そんな時はどうしても遠慮がちな若手に対して言います。どう教えて貰えれば分かりやすいか考えて教えてくれ、って」。

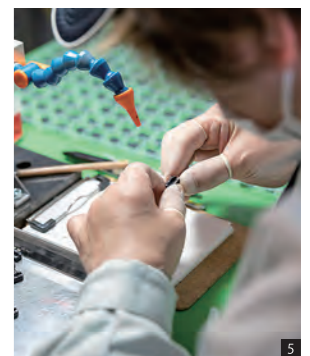
技術の向上を目指し、社員一人ひとりが+αを考え出す会社の土台は祖父や父から受け継いだものだが、それを会社全体でフォローする環境を新たに作り上げたのは、時代に合わせた変化を恐れない氏神社長の手腕ならではの。今年の7月には、15年ぶりの全社員での社員旅行も計画中だ。


世界に勝てる技術力で 一歩先の未来を提案する

社内環境の充実を図る一方、氏神社長は経営者として常に世界に目を向ける。創業当時は日本電信電話公社へ納入する電話機の端子部品が中心だった製品群も、現在は、近年普及が進む電気自動車をはじめとした車載製品が売り上げの半数を占める。特に日本の部品は世界でも評価が高く、中国に構えたプレス工場での生産も順調に推移している。ここにビジネスチャンスがあると氏神社長は語る。

「これからも培ってきた技術力で世界に勝つことを目標にしています。便利になればなるほど複雑で小型化していく製品が求められる時代。今後も端子と名のつくものは何でも挑戦していきたい」。

今年も新しい製品開発のために設備投資の充実を図る予定だが、それを使いこなすのはやはり人。若き社長が信じるチームワークの力で、大仙市の地からこれからも未来を提案し続ける。





東京端一株式会社

秋田事業所(本社)&秋田営業所
〒014-0805
秋田県大仙市高梨字田茂木1番地
TEL.0187-63-1101
FAX.0187-63-5969
http://totan-asia.jp/

- 創業/1952年
- 資本金/4,800万円
- 従業員数/92名(国内)・125名(中国工場)
- 営業品目/プレス金型設計・製作
インサートモールド成形設計・製作
超精密プレス部品加工
超精密自動インサートモールド成形加工
機工部品ASSY